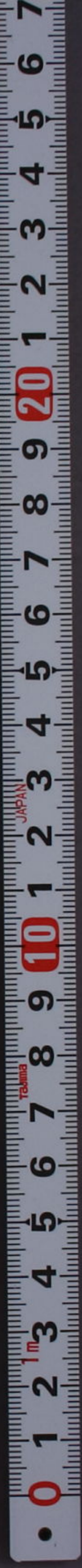


海外異聞

二

特別  
ル 2  
3088  
2



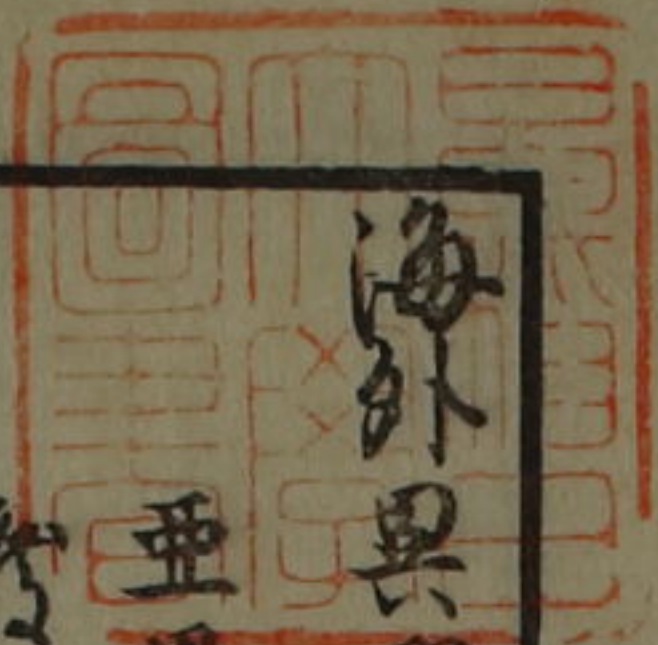


門 2  
號 3088  
巻 2

海外異聞卷之二

亞墨利加より便船にて得て唐土廣東に  
渡りてその話

ラツバスの船にボンとソム者あり勇くサンボセても付て  
来りニゲリテヨウサと親しく健來り初を命くもよく  
え知り居たりとらが十月の初に初を命くべしとの縁者  
曰ふく健れいれベロニ初を命く向ひて方日本へ海をの  
志ありとやと曰ふ初を命く老あり父母あり瓦蓋里  
と思ふの情好くも高き一紙とて其入ベロニが白ク  
然らば家善くすや斗ふなりニゲリテヨウサをそ

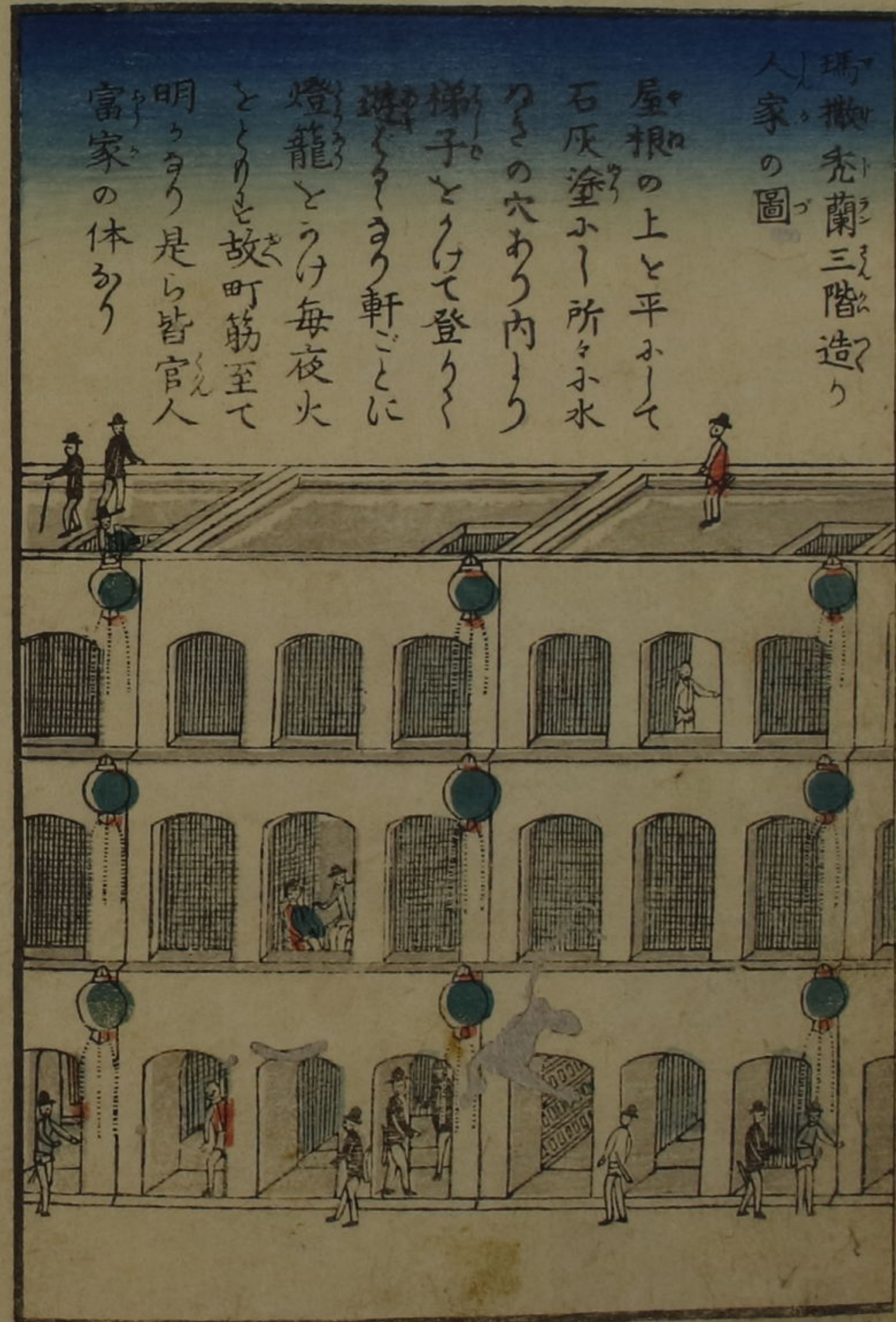


早稲田大學  
昭和25.6.28  
蔵 来















加の内へは折るに感むは使臣もあらば一先か合を  
 見届く一と有りかかまは後程なく彼人のあらはれ  
 四五日の舟より唐土へ出帆の船ありとの事知せし  
 くれぬ商人ベロコに向ひサンホセ小舟を七人の民に  
 家畜より艱苦も多し何れを一雨の連雨に  
 云々云々ベロコが曰此地より唐土へ使臣あり一年に  
 一度の二度一毎に此舟を乗換ていつる所ん船を  
 知りぐし一と海に四百里もあるサンホセ一七人の老を  
 迎ひて往く使臣のるは十日かゝるなり一彼船いふ  
 定しく往くべきとや凍よ得るよおまの使臣うれば

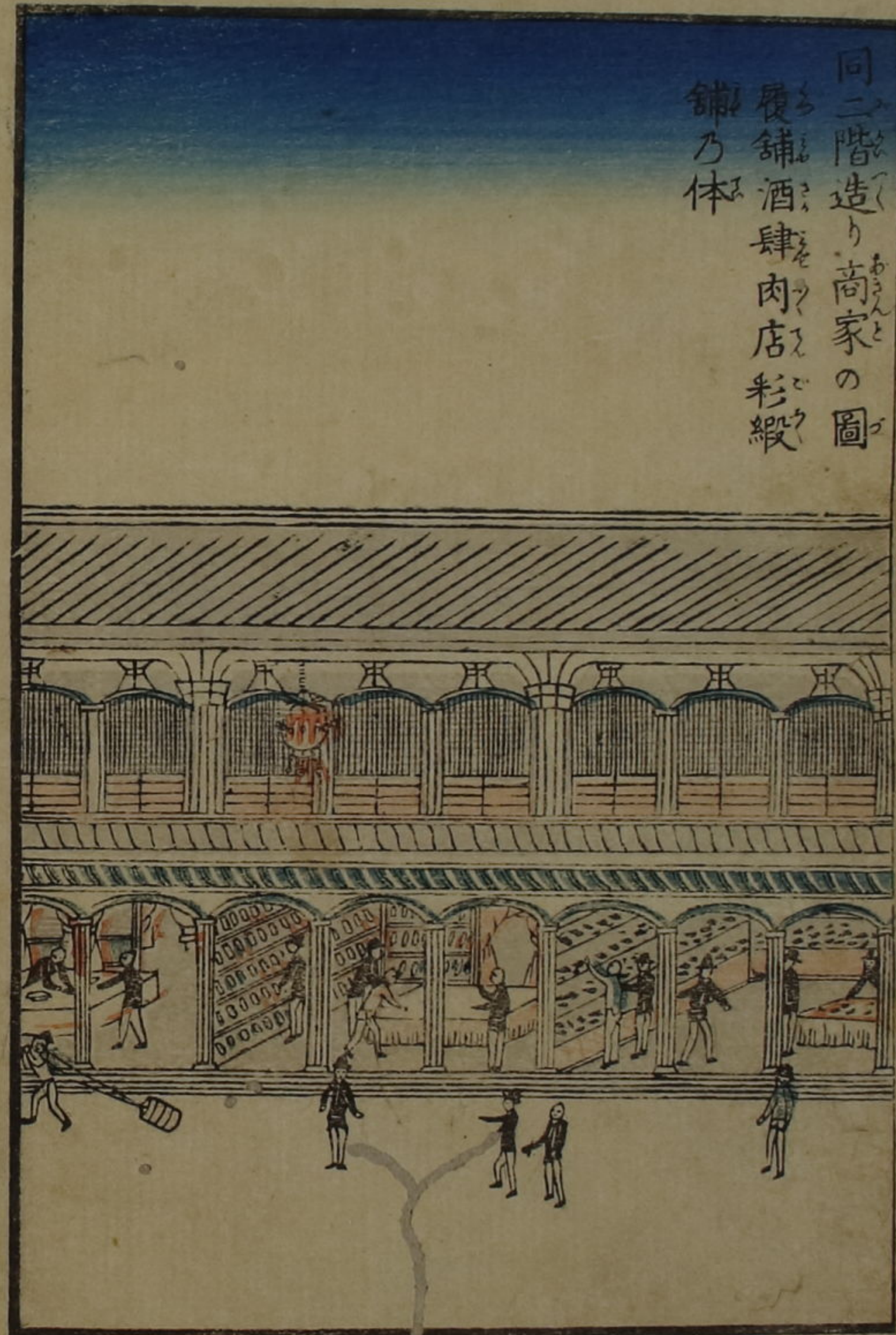
海二ノ三

西王乃志一りはあく二案う濟る一七人同船  
 ともものもそも時入まじしとまき色は商人漢金  
 云甲人先親と斗とそも急なく帰る一若くはせ  
 るは皆げれは曰理の人とそも急なく一使臣理を  
 建て此使臣一おらきと九人空一と使臣  
 朽果んすれ斗り船と心は空一物おれ先親と  
 商人の海海す一と急なく朽くろるベロコ義船て  
 初を所善助と痛りりてけ地とと先さあくる  
 先法給一四屋の妙に家一止宿ゆとささるうり  
 とも西サンホセの家をミダリチヨウサ先達てうけ









同二階造り商家の圖  
 履鋪酒肆肉店彩緞  
 鋪乃体



船てそ船二百二十枚取りし内百枚を船賃として  
 彼船へ渡し衣服等酒肴御膳等百四十枚  
 商人等其の御用達の雜費は之よりとらう三月目ふ  
 ベロニ商人は暇をとりてサンホセへ歸るは其とて  
 西人より七太郎と始り七人の衆のこゝと云ふたのこ  
 りれいベロニ中位一時を雜用多めりて叶はざり  
 便船のあるに式人三人を遣はし送り返して  
 乞うけ合始の船にてサンホセへ歸りしは彼レゲリ  
 テヨウサカ初冬帝と子の如く悲しき恩恵を忘る難  
 うれし又ベロニが商人と故に御さんとてさあぐり

海二ノ五

世話をししは伝実ありはうとなつてしれ神仏の御  
 心も善心の人こゝろを遠たらしきし  
 是より美里の波濤と凄き日本へ海へんすは易  
 かもしと頼りしを思ひたりてマサトラン小  
 遣留しし吾王宮を十一月三日彼使を遣り  
 マサトランと出帆し西の方へ向ひ航ししは船をサ  
 十七回帆柱二本帆柱十枚あり流帆之の如く等組  
 九人皆亞墨利加人あり唐ちと買物り舟船を在  
 荷物の掛りしと積たるは吹風多し帆と揚  
 ぎしは船の速なりしと云傳りしは又船以副



船はたゞつゝ老若くは後相傳へて天文の  
 考へ海路と測り船の速速とためすも蒙とせん  
 物志りのなきに幾日の何れを何れも破有るや  
 海らへ一何の刻も何處の方よ山と云ふしと云ふは  
 二三日もあらず知り幾千里の及と走らざるも遠く入船  
 する所の丁度なりと云ふなりと遠く入り合ふ  
 又種々の道具眼鏡等もゆく日輪を會て度計は  
 測り今いれ船に十何處何處の所もあらずといふ  
 つまじくは知るなりと船中の人初を命をうけ  
 唐土日本の船い山と見せしむる旨も同じ我らも

海二ノ六

日

船よけい登り日と山と一夜の星と山と云ふは  
 海とよ遠く大日と星をさへ見せしむるは  
 恐るるなりとあり船日而海らて日と星と云ふは  
 志公と常きものよ又洋中よりいふは風浪  
 ありて事なりと云ふ唯陰を記し下りて礁石  
 ありと云ふは語りたり既にさへ小言て矣  
 洋中より春を述べ漸く去近くされ海水の  
 濁りて水と云ふは不なり余は沖より唐土の  
 多くあり北方と離るるに幾十里あり在  
 ありて米薪水と云ふは送るなりと云ふはマサトラニと出



一 凡七十日、唐古、廣東のみならず、澳門と  
 云取、島守、外國、此は三月中旬の事ありあり  
 着、船より三日、目は初、舟を人、陸へ上、き、し、し、  
 若、物と一、雨、上、う、さ、由、さ、る、る、教、  
 是、よ、ら、く、持、来、り、し、浪、涉、六、十、  
 別、れ、ら、ま、り、端、舟、で、渡、く、  
 唐、人、数、多、集、り、来、り、て、  
 玄、借、通、せ、ざ、れ、ば、砂、の、  
 う、ら、づ、き、て、有、ら、る、  
 四、り、と、利、て、頂、の、  
 丸、く、砂、  
 三、ッ、折、舟、  
 二、百、二、七

後、ら、へ、多、き、ら、衣、類、を、  
 半、の、一、地、人、家、凡、一、  
 とも、町、幅、を、  
 去、サ、間、も、り、  
 い、板、張、り、  
 り、カ、の、人、  
 け、地、の、人、  
 此、高、船、  
 喫、吃、喇、  
 唐、人、  
 天、堂、  
 天





瑪<sup>マ</sup>撒<sup>サ</sup>禿<sup>ト</sup>蘭<sup>ラン</sup>澳門<sup>マカオ</sup>の圖  
所々要害の場所あり  
石火夫の臺場あり





刺て多に既中をわがし居る夫々をく船肥より長  
宋の人と回航たりきた天窓のうがりあひ業人といふ  
を余西洋人の大抵一抄くすけ家よ去り辛巳十月に  
漂流しつゝ加賀領能登の國風至那月村の者  
惣七流之長流といふ二人又十一年計日あつた漂流  
多る肥後玉川尻の者庄藏壽三希徳を命と云ふ人  
皆一室に居たり漂流の始末より今よあつたの流儀  
具さすお供なればいふ事いふ事初を併い  
正月月中旬より此家より右の人と号し同居し食事は  
所持の銀砂と出しく兼魚肉の類を酒の自り日産し

たりし多り始て月代をきり対いけと娘一か  
り最子此家より右の層りあつた今迄月日と  
委お知り又遠め申し肥後の考し誘われ所々  
えお知り社といふ下一向はたかく佛圖に  
何事も日本の黄檗宗の寺院に似たり教場も  
て見物をしつゝ元より何れかいあらざりく之芝居小  
ていたくおと出り来ると雇ひてさるる在末戸お  
公事しつゝ誰とも見えぬ也男女の流儀は  
商人絵巻りや一も替りしな女子をさしお  
まらと一とさる由り知より借りて是と纏ひ



たきく形ぬ樹よりなる大人の是くも七八歳の  
小児のどく歩行がり腰とかのめくはの介を著し  
之より二月半旬より四月十日迄九九十日中より澳門に  
逗留せり

廣東より右浦小護送りれ日半より浦し活

四月比よりりて世家より右浦へ使船ありとの事やと右  
往きの者二人初を命と回しくも船より来り四月十日不出  
帆を世時紀後力者比云ふ近年唐々と西洋と然い乃  
有りし通る事アメリカより對ひし衣服退るとの事

所持しそりく西洋の間考と疑りも一は船の跡を  
後よりと云ふ事ありと云ふは船の跡を  
よりと云ふ事ありと云ふは船の跡を  
初よりと云ふ事ありと云ふは船の跡を  
江西一都陽を流り湘江より入るは澳門より  
舟の寧波より福列より便直に舟より送る  
定法よりと云ふ事ありと云ふは船の跡を  
法よりと云ふ事ありと云ふは船の跡を  
左よりと云ふ事ありと云ふは船の跡を  
福島の月慶門の澳の舟より舟がりに是迄の能三百



里余厦門の地とすけど其嶋より人家只一軒  
 あり日卒しそしと書石たてて其後には津船すも  
 幸ふ六日五月上旬厦門より東部のかき向て船行  
 之百里も来りつゝむと思ふ所なり船を操りけし所を  
 チンモウといふ地暫く一丈の溝ありて双方の  
 山に倚り人家百軒程あり皆漁と云く業とする  
 之と唐土の海辺如く片灘ありて山崖のありり又  
 砥滌あり山岳も高く見ゆ是れ彼土人第一名所の  
 名を教へば又礁石あり見ゆは法進き西の海を濶  
 たる海に注ぎ只福州の海辺の如き泥たる所ありり

五月下旬よりなりてチンモウの船六月十日ニシホウと云ふ  
 船より寧波の如く其間も三百里も有りて其間  
 よりニシホウ迄凡そ九百里あり其間をけし所は  
 甚ど町幅狭く日本の大坂の如く縦横に路を画  
 運送する自由ありと云ふ則と陸に人種を  
 送るに亦十日より運送を是より在浦に海と  
 海をば僅くも五十里程あり其間を川舟にて送る  
 事ありあり同舟日寧波の如く船は初を命陸  
 部の人二人船に水手約合八人乗船別は船長の  
 船は役人乗しり所より附居し乗用する所あり



廣東  
澳門の圖

此所小島あり  
英吉利船の  
くり場あり



此所諸蕃の邸並小  
行家商家など多く  
連とる沖のく  
山の嘴までも  
町つとるあり  
外國の船唐  
人の船すと  
あつぬなく  
多くかり  
居る也





名も取の解細く家根あり門物狭小港門舟  
 左右に控あり川幅五六百又を甲乙名のあり水  
 溜りたる拍を細くあり一たびは回船速くそ  
 ぐく懸せし船風も一たびは帆とくけ風ありき  
 時の遅くありて引けたる左右に意廣く進く見  
 山をたし同廿六日ホニテウとつりつて  
 舟所の役人交面してニボウの役人の帰りをり  
 卯年唐土より七月に皇有しと九日と逗留  
 所のやうに奇麗なりされは市中性素の所  
 きたり船を就しあるあり市店の飾り拍を  
 海二十一

見知るに駕籠をたれ之方板を深左に取あり  
 見物人何れも一と見たり一と見たり  
 らるるもあまの浦をの月之下を改と  
 多れたも地名の知るに独りだ同十二日名浦  
 ニニボウとつと二百里ありしと見たり  
 船を就しあるあり一と見たり一と見たり  
 葉月一と一と見たり一と見たり  
 夜の人一と見たり一と見たり  
 船の装束を著し玉の飾あり  
 左右に下敷千人ありて立たり



漂流の始末年月下海りておれが別をたずとせん  
 流と事終りて廻り流係るの家の下記に及連行の  
 け家は粟野の漂流人六人飛りて是れ母の十月小  
 川流を幸茶を嘗て漸け及りし心伴達那  
 半田村十吉のものを船の——仙者領のもの三人  
 石の巻石浪元仙出羽上の子計人南船領の妻を人  
 之ヶ所め者なり初太郎等を合せて以上九人とも是より一箇をたりて  
 日本に流る幸茶方おれを今を流く思ひくも去なり  
 七太郎をくめ七人の者初郎の下く一宗より流りて  
 め何むりり嬉しうん又善助も幸を乞えうく思ひ

飛りて此下その食事朝粥昼晩は飲り二書代り  
 の兼らりり——あくと下系あり葉草り油揚り物  
 或は太刀魚大おんの執を焚たりを食は凡し地、  
 包しは湊より人家一萬軒ありたり去れとて  
 日本のお座よりびる家居ありき極之法人群集  
 とも幸を極て旅やうり寺院も多あり店屋折  
 のら中あり日本の品を賣る店ありお油ん布あり  
 價は又急騰ありその紙も傘漆木綿素麩煙  
 茶味噌の類多く日本のお多あり九月八日下りて  
 斗らび善助も幸り折子いうり為る是二月申旬



澳門に於て是より長く航海を營く舟に  
 送り今日漸く此の海を過るるに  
 格別の銀錢をたかりしを人々  
 有りきと各々を証しし供に  
 留るる所おとす百三十日を  
 町内歩きのもの必に役人  
 思ふに此の船は土月十六日  
 者五人を助長に命ずるに  
 形に承りし、出帆は同女之日  
 此の船は以上四人は泉  
 以上四人は泉

三十三



青葉の付たる  
 樹枝を長き  
 帚とあつらへ  
 うちと掃除  
 用也

食物を焼く電の圖







誓をたてて去りて登る心地あり聖土二月朔日約  
 二の山道くろまきり忽て唐舟渡来のち山玉物名  
 山え田名而よ玉の鶴を殺し酒を飲りて後船を  
 ちと海玉まらるる唐去の山をえまら日ひは移し  
 かなととどけ時九夫は移し喜びて口人の者やえ  
 酒穀とをえし〜〜〜十一月三日肥前長崎の港小  
 恙なく入津に翌四日源義朝入津して彼五人の  
 者一雨よりきり三日月立山山を所の白洲  
 二流く始て源流し対面ありたる政方由為あり  
 則亞墨利加より名士より傳門より寧波抗列を經

天浦より唐船不承り南邊ゆりし後果々〜〜〜  
 舟を渡御し山玉あり義居の名山嶺の釣汁は番お  
 色い魚類の黄丹晚い葉漬〜あり〜山役人來りて船の  
 するルあり〜〜〜し林業あり〜〜〜し  
 月代はさき〜〜〜月〜〜〜つ湯〜〜〜し月代は酒は狭  
 二月は六月八日各單物一枚帯一筋づ〜〜〜  
 舟のちの早速下帯を船に載ひ一々傘下を  
 船に下され〜〜〜友府のし思〜〜〜し  
 愛苦も形〜〜〜志〜〜〜し不日ありて旧里〜〜〜



父母の福を乞ふるなりといふ年姪はなかゝんと樂あはしむる  
 ありたりすまし今辰の年うらは移り春色はるに暮なけ秋七月  
 廿五日ふたし朝あさの者ものをあらわるるの内うちにあらわるる福ふくはあらわるる人ひとは  
 弟あにとあらわるる有あらわるる初はつをあらわるる思おもふふ一ひとをあらわるる者ものは  
 善ぜんのの人ひととあらわるる我われとあらわるる者ものはあらわるる我われとあらわるる  
 んんとあらわるる者ものはあらわるる女めはあらわるる日ひはあらわるる奉ほうはあらわるる出いはあらわるる阿あ  
 別わかりあらわるる由よしとあらわるる作しはあらわるる月つきはあらわるる皆みなはあらわるる阿あ  
 おおとあらわるる日ひはあらわるる皆みなはあらわるる阿あ

海外異聞卷之二 終

海二五





